

談話研究と言語教育

宇佐美 まゆみ ● 東京外国語大学 助教授

usamima@fs.tufs.ac.jp



会話の状況設定、コミュニケーションと言語の機能、会話に現れる社会的文化的要素など、談話研究はコミュニケーションを取り巻くさまざまな領域にまたがる研究です。

ここで、心理学、社会学など関連領域に幅広い知識と研究業績をお持ちの宇佐美まゆみ先生に、談話研究の領域を概観し、言語教育との関係を整理していただきます。

1 はじめに

「談話 (discourse)」という言葉がよく聞かれるようになって久しい。広義の「談話研究 (discourse studies)」は、言語学のみならず、社会学、心理学などともかかわる一つの学際的研究領域として発展・確立しつつあると言ってもいいだろう。しかし、「談話」という言葉は、あまりにも様々な領域で用いられるようになっただけに、用いられる分野や文脈によって、その意味するところや受け取られ方が、微妙に、或いは、大幅に異なっているのが現状である。そのため、「談話とは一体何なのか?」「談話分析と会話分析は、同じなのか違うのか、違うとしたら、どう違うのか?」「談話の研究は、どのように言語教育の役に立つのか?」等々の疑問をお持ちの方も多いことだろう。

そこで、本稿では、主に、「談話」という言葉が様々な領域でどのように用いられているのかを簡単に整理するとともに、「談話分析」や「会話分析」が「第二言語・外国語教育」や「第二言語・外国語教授法理論」の流れとどのような関係になっているのかについて概観する。

2 談話とは何か

「談話 (discourse)」の定義は、厳密には各研究者によっ

て異なるが、大きくは狭義と広義の二つの捉え方に分けて考えることができる。狭義のものは、「談話とは、文レベルを超えた意味的まとまりをもった言語的単位である」という、あくまで言語を中心にした捉え方であり、それにかかわる研究は、言語学の一領域として、「談話分析 (discourse analysis)」と呼ばれることが多い。このタイプの研究は、文字通り、文レベルを超えた、一文ではない二、三の文が「意味的まとまり」を持つ「談話」として結束性を保つために、どのような言語的装置 (linguistic device) が使われているか (ex. 前文の主語を代名詞で受ける等) と、その規則を明らかにしようとするのが主な目的である。そのため、書き言葉・話し言葉の双方を対象としており、文レベルの言語学で有効とされてきた方法を談話にも適用して、「適格性、不適格性の判断」を直観に基づいて行う (つまり、これは談話になっている、なっていないなどと研究者が判断する) という研究方法が取られることが多い。言語教育の分野で、「談話」という言葉が用いられるようになった当初は、この狭義の意味合いで用いられることが多かったと言えるだろう。

一方、「談話」の広義の捉え方とは、二、三の文のまとまりとしての談話という狭義のものも含むが、むしろ、話し言葉では「会話 (conversation)」、書き言葉では「テキスト (text)」などの、もっと長いものを主に意味する捉え方である。し

かし、言語学の流れの中における書き言葉の研究は、「テキスト言語学」と呼んで、話し言葉の「談話分析」と区別する傾向もあり、これは、特にヨーロッパで盛んである。また、ヨーロッパでは、言語表現の背後にあるイデオロギーを注視した社会批評的観点から談話を分析する「批判的談話分析 (critical discourse analysis)」も非常に盛んであるが、この分野になると、政治科学 (political science) などともかかわってくる。

さらに、最近では、言語学者、心理学者、認知科学者、工学者などが協力して、書き言葉のみならず、話し言葉、すなわち、「談話のコーパス」を作成する動きが、英語のものを中心に盛んになってきている。このアプローチは、大量の言語データをデータベース化する必要性などから、学際的分野とはなっているが、これにかかわる言語学者の関心は、やはり言語、談話の構造解明にあり、むしろ、狭義の談話分析の関心と通じるところが多い。また、工学者の関心は、機械翻訳やトピックの自動検出、追跡検索など、談話構造に関する知見を生かして、それをなんらかの形で機械化することにある。これらのアプローチは、そのデータの質や解析・分析の方法とも絡み、「自然言語処理 (natural language processing)」、「コンピュータ言語学 (computational linguistics)」などとも関連が深くなっている。

このような状況の中、談話を広義に捉えている分析や学際的研究を指す場合、先に述べた狭義のものと区別するためにも、「談話分析」ではなく「談話研究 (discourse studies)」という言葉が用いられることが多くなってきた。かわる領域も言語学のみならず、社会学、心理学、認知科学、文化人類学などと広範に渡り、その研究目的も、方法論も様々になってくる。

3 談話分析と会話分析

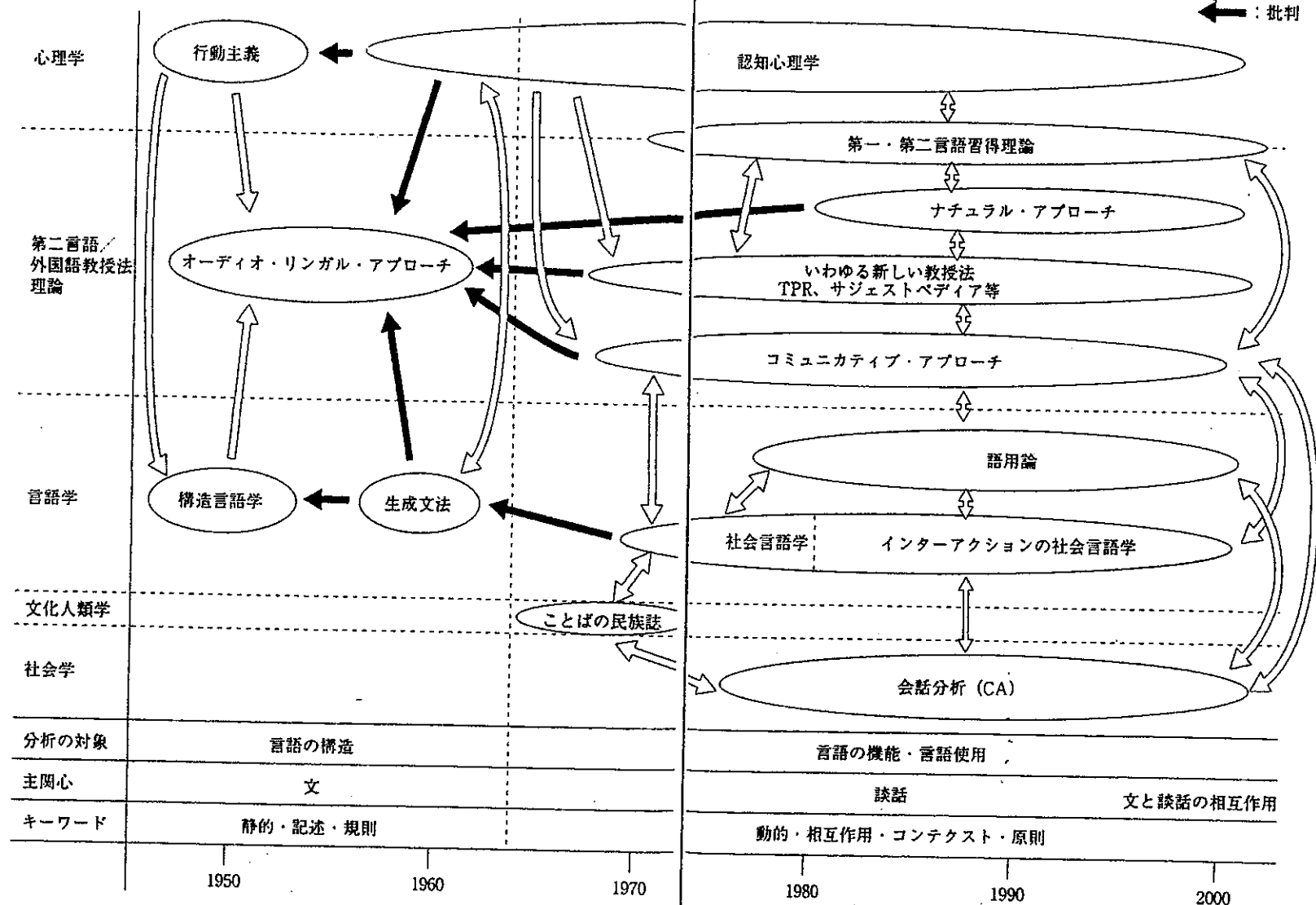
先にも触れたように、談話を「一定のやりとりのある比較的長いもの」と広義に捉える場合に、「会話」という用語が使われることが多くなった。狭義の「談話分析」は、構造を重視した言語学の影響を受けたものという印象が強かったが、言語学の領域における、広義の「談話分析」は、「インタ

ーアクションの社会言語学」の創始者 Gumperz, J. や、言語教育関係者には、「伝達能力 (communicative competence)」という用語の創始者としてよく知られている Hymes, D. の「ことばの民族誌 (Ethnography of speaking)」研究からのアプローチなど、言語学の関連領域としての文化人類学における研究方法や成果を取り入れて、発展することになる。これらは、むしろ狭義の「談話分析」ではなく、より長い「会話」をその研究対象とし、研究の目的も、「言語構造の分析のために、文レベルを超えた談話という単位を見る」というよりは、人間社会のダイナミクスを反映している「談話、或いは、会話そのもの」を主な興味の対象とするものになったのである。しかし、今では「会話分析 (Conversation Analysis)」という言葉を固有名詞的に使うときは、サックス (Sacks, H.) らに端を発する社会学の一派としてのエスノメソドログストが行ってきた会話分析を指すようになってきているので、エスノメソドログストの影響を受けつつ、タネン (Tannen, D.) などの社会言語学者が発展させてきた「会話の分析」は、英語では、「Conversational Analysis」として、エスノメソドログストのものとは区別されるようになってきている。また、さらにこれらと区別するかのよう

に、心理学者は、「自然会話分析 (Natural Conversation Analysis)」、「談話処理 (Discourse Processes)」という用語を用いるなど、用語の使い分けがなされる傾向にある。しかし、日本語で、「会話分析」というと、エスノメソドログストらの社会学のアプローチを想起する人もいれば、タネンら社会言語学者のアプローチを想起する人もいるなど、人によって捉え方が異なっているようである。また、心理学者のアプローチを想起する人は、未だ数少ないようである。故に、日本語に英語における用語の使い分けを細かく反映させても、現状では紛らわしいだけだと判断し、今のところ、筆者は、「会話分析」への言語社会心理学的アプローチのように、特定のアプローチを明記する場合以外は、いかなる立場、アプローチのものも含む用語として、「会話の分析」、或いは、文脈に応じて、「談話研究」を用いている。

このように、関連領域が相互に影響しあい、複雑な様相を呈している「談話分析」「会話分析」にかかわる状況を、あえて簡単にまとめると、以下になるだろう。

図1 談話研究と言語教育（隣接領域関連図）



■ 談話研究が日本語教育にもたらすもの

1)「狭義の談話分析」と「広義の談話分析・会話分析」は、前者が言語の談話構造の解明を主たる目的とし、後者が、言語・社会・人間の相互作用の解明を主たる目的としているという点で、目的が大きく異なる。2)広義の談話分析は、「会話分析」と呼ばれることが増えてきているが、厳密には、この「会話分析」の領域には、目的や方法論が異なる幾つかのアプローチが関係している。3)一番大きなくくり方として「談話研究」という用語がある。

4 談話研究と言語教育

上にまとめたように、今日では様々な領域で「談話研究」が盛んになっているが、「第二言語／外国語教育」とも関連が深い社会言語学、語用論の領域で「談話研究」というと、最近では、むしろ言語学における狭義の談話分析ではなく、「話し言葉」における、ある程度長い「談話」、つまり、「会話」における「相互作用」に焦点を当てた研究を指すことが多くなってきているようである。これらの領域の中で、最近では、質問紙調査や談話完成法 (discourse-completion test) の結果からだけでは明らかにできない、実際の相互作用におけるダイナミックな言語使用を捉える必要性が叫ばれるようになり、それが、昨今の「会話の分析」への関心の高さ、研究の増加となって表れている。それは、「言語を社会とのかかわりの中で捉えようとする社会言語学」、「言語使用の法則を解明しようとする語用論」の発展とほぼ期を一にしていると言ってもよい。同様に、これら関連領域における流れは、これまで、言語の構造の教授を中心にしてきた言語教育が、言語の機能に着目し、実際の言語運用、すなわち、第二言語／外国語における自然なコミュニケーション能力の育成を重視するようになってきた状況、或いは、そのニーズが増加しているという言語教育における大きな流れにも、影響を与えている。

pp.24-25の図1に、言語教育と、関連分野の相互交流の関係と、その関心の流れの概略をまとめてみた。様々な分野間の相互交流のすべてを图示することは至難の技であり、また、すべてに丁寧な説明を加えることもできないが、ここでは、これまでに本文で言及していないものに簡単に触れ

ておく。図の中の「第一・第二言語習得理論」は、言うまでもなく「言語教育」と非常に関連が深いもので、心理学・言語学双方の影響を受けながら発展し、現在では、既に一領域として確立したと言ってもよい領域である。この図はあくまで、「談話」への興味、研究の関心、対象の推移を中心に表したが、少し言葉で補ってくと、この「第一・第二言語習得理論」に関わる研究においても、これまでは文レベルのものが中心に扱われてきたが、最近では、ターン・テイキングや話題の管理 (話の進め方)、会話のストラテジーなどの談話レベルの要素がいかに習得されるのかということに、関心が持たれるようになってきている。これは、まさにこのような現象を、第二言語 外国語教育の中でも扱う必要があるというニーズとも連動しているのである。

5 おわりに

本稿では、紙幅の都合もあり、主に、「談話研究」に関わる用語や概念を整理し、簡単に概説するに留まらざるを得なかった。しかし、より具体的な内容については、本特集の中でいくつか扱われていると思うので、それらを参照していただければと思う。また、実際の会話の分析手順として、近年、できるだけ多くの人が、比較的簡単に、録音した会話の文字化ができるようにと、筆者が開発してきた「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)²」の方法とその文字化の方法を使った分析例についてもご紹介したが、それはまた別の機会にゆずりたい。ただ、本特集の西部仁朗氏の論文に少し触れられているので、興味のある方はそちらをご参照いただければと思う。

注 1 扱うテーマの関係上、宇佐美 (1999) と一部重なる内容や記述もあることをお断りしておきたい。ただ、「会話の分析」への幾つかのアプローチの特徴等については、より詳しく知りたい方は、こちらを参照されたい。

2 宇佐美 (1997) を参照のこと。

引用文献

宇佐美まゆみ (1997) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」の開発について」『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費基盤研究 (C) 研究成果報告書 (この報告書は、以下のURLからダウンロードできる: <http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/mic-J/nihongo/mic-j-kaiwa.html>)
宇佐美まゆみ (1999) 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ」『日本語学』第18巻第11号10月号、40-56、明治学院。

